

「ぼくらの“チャンバラ事件”を考える」

白井 勲

僕の小学4年生のときの“チャンバラ事件”は、「僕のセピア色の思い出」の中でも記念的な事件である。この事件の首謀者（と言えはすし大袈裟だが）の一人北岡くんが今年6月に亡られた。僕ら同年の仲間たちのなかでの出世頭とも言える存在で、米国にも工場をもつ大きな会社を立て上げた男で、僕の拙稿の中で何度か書いた「堤先生と囲むフラス会」の強力な助手だった人で、彼がいなくなったのは何ともさびしい限りだ。この還歴をすきてからのフラス会のキッカケを作ったのがこのチャンバラ事件であった。僕らの花水小、浜岳中の合同同窓会が還歴を機に箱根で催された。一泊するものだった。その時同宿した仲間が一人が奥本くん。寝酒の酔いも手伝ってか、寝ながらかつての“チャンバラ事件”の結末に悲憤慷慨していたのである。その顛末はこうであった。その頃の僕たち男子生徒の仲間10名ちかくは、放課後、学校の近くにある桃浜公園に集結した。ランセルヤカバレス公園近くの北岡くん宅に預け、公園で棒きれを振り廻し、チャンバラごっこをして遊んだのである。夕暮れときになり、そろそろ解散しかけたとき、その近所に住むひとりの小文さんがカメラを手に近づいて来て、「そのチャンバラ・シーン写真に撮りたいから、もう一度やってくれ」と言う。僕らは二手に分れて列を作り、棒切れを交差して闘うポーズを取った。翌日、登校すると、フラス担任の堤千枝子先生が、こわい顔をして読売新聞に大きく載った写真を示し、「このチャンバラごっこした者は職員室に行って校長先生に謝りなさい!」と言われた。顔を大写にされた者が立って、職員室に出向いた。それだけの事だったか、正直に言って、どういふ事がよく分らなかったし、僕は後の方において顔が目立たなかったので行かなかった。大きく写った北岡くん、奥本くんといった面々は校長に謝ったと言う。後年、堤先生のフラス会の常連の一人笹本くんも「実は、行かなかった」と僕に告白した。僕ら一月は皆、何か納得できず大人に騙されたと言う後味の悪さが残った。奥本くんが還歴に成ってまで大人に騙され」と言う。大人社会への不信感を覚へ、一種の社会への警戒感を醸成させてしまったかも知れない。もっと詳しく、その点を彼から聞き取ったが、彼はフラス会に誘って来なかったのもそれは出来なかった。僕自身も彼と同じ感情を持っていた。「なぜあの小文さんは、自分が新聞記者と名乗らなかったのたうか。またなぜ堤先生は、その事で僕らを謝らせようとしたのたうか。先生自身の思いというより、ニュースを知った校長は、教職員全体の反応を堤先生が代弁させられたかも知れない。その事を堤先生に尋ねなかったのが今になって悔れる。その時のチャンバラ写真を掲載した新聞の論調はどんなものだったのたうか。今日に写真が載っても、今と違ってごっこ遊びが子供たちにはやっている」と言うた4のものたうか。あの時、1951年(昭26)の世相というものを考慮しなければならぬ。まず僕自身に起きたことは、その前年(1950年)に、10月に母が痛くて死んだ。その時の思いを何度か拙稿に書いた。この事件があった頃は、その悲しみから立ち直ろうとしていて、少年らしい色々な遊びに奔走していた頃で、また世相も大きな転換期を迎えていたと思う。敗戦から5年84月のマッカーサー元帥の日本統治が'51年4月11日に終わった。それは'50年6月に始まった朝鮮戦争がまだ続いていた。(この戦路のことでトルマン大統領に解任された)。吉田内閣が続いており、'51年9月9日 サンフランシスコ講和条約が成立して、日本が独立を回復した年でもあった。マッカーサー時代の晩年は、敗戦から平和憲法制定の平和路線から、米ソの冷戦時代に向かうなか、朝鮮戦争が始まり、日本の再軍備が求められ、日米安保条約が締結、自衛隊の編成と目まぐるしく社会の潮流が変わって行く時代、少年期の僕らの遊びも変わってくる時代であった。そんな中学校の先生方も、その変化にとまどい、困惑する時代だったのでは

なかったろうか。朝鮮戦争が始った頃、僕ら子供たちの遊びも変化していった。例えば子供が読むマンガの世界などで、その変化を敏感に捉えていたのではなかったろうか。母が作った小学3年生の頃から僕らが読んでいた月刊マンガ雑誌「冒険王」とか「面白ブック」「少年」にゼロ戦や戦艦「大和」などの詳細なペン画、そして柔道や剣道のヒーローを描くマンガや小松崎茂の描く西洋画のようだから、こいっ泣機のパイロットが登場している。福井一郎の「イガリくん」とか「赤銅鈴文助」とかが連載されていた。かつてマッカーサーによって日本古来の武道が禁止され、歌舞伎や映画も、チャンバラや決闘シーンが制限されていたと言う。僕ら子供たちの方が、その点ばかりに自由で、その変化をマンガなどを通じて先取りしていたような気がする。映画も'51年(昭26)9月には、ベネチア国際映画祭で、黒沢明の時代劇「羅生門」がグランプリ受賞している。僕はその受賞の年に、近所の農業会館ホールで記念上映されたものを、子供らしいおしゃべりで大人に混りて見たが、おすかしく、意味がさっぱり分らなかった記憶がある。日常の僕らの遊びでも、7-ザンごっこや戦争ごっこが盛んであった。

近所には、原っぱや戦前の防空壕などが残っており、そんな所で戦争ごっこをやっていた。あるとき僕らは本物の日本軍の鉄砲を使って、ごっこをやっていた。その頃、国鉄の線路から鉄工場への引込線があって、その線路の脇に、戦後処理された旧陸軍の鉄砲の残骸がうす高く積み上げられていた。そこから矢撃してきた赤サビてはいるが本物の鉄砲をつかって僕らは戦争ごっこをしていたのだ。やがて僕らはそれらがクズ鉄屋さんに持って行くとお菓子代になることを知って、悪ガキどもがわれもわれもと取りに行き出した。とろろがある時を境に、それらのクズ山がとっさと姿を消したのである。やがてそのクズ鉄を満載したトラックが走って行くのを目撃するようになった。あとでわかったが、その時が朝鮮戦争が始ったときであった。この時から日本の景気はうなぎ上りになって行く。僕はこの年のクリスマス、めずらしく、ホワイトクリスマス。雪が降って積った日曜日の朝、平塚駅の貨物駅に行って列車をながめに行くと、貨物列車に、幌をかぶせた米軍の戦車がずりりと並んで載っていた。少(前の11月に)中共軍が参戦したのだった。横須賀基地まで列車で運び、船で朝鮮半島へ輸送するものであったろう。そんな目撃がなされる時代であった。僕たちのチャンバラごっこも、そんな時代の空気の反映だったのであろうか。とろろが先生方は、マッカーサー初期の「戦前の戦闘賛美の否定、平和主義、闘争スポーツ禁止令の縛り」がまだ続いていたのだろうか。

新聞の「近頃子供たちにこのような遊びがはやっている」という写真は、記者が見たその頃の現実を伝えたものであったろう。しかし、おしゃべりした堤先生はじめ教職の方々は、マッカーサーの禁止令が頭に浮かび、「こんなキケンな遊びがはやってはすまい」と瞬時に思われたのに違いない。それが「校長先生に謝りなさい」の意味だったのではなかったか、それにしても、奥本くんをはじめ僕たちが怒った。「大人に騙された感」も事実なのである。まず第一に必要なのは、おしゃべりを取扱った記者の作文さんの正直な態度こそ最も必要だったのでないだろうか。もし正直に「こういう取材のわけで写真撮らしてくれ」と言われれば、4年生であった僕たちは理解できたと思う。そうであったら、たとえ先生方に叱られても、騙されたとは思わず、大人社会への否定的懐疑を抱かずに大人になりにくい。正直こそ最上の策である、とのことわざは、いつの時代にも生きていくことばであると思う。